島根県農業技術センタートピック

ときめき

No.452
2023 2-14

【有機水稲】収穫期にノビエが残った時の対処

ちょっとした作業管理と機械設定で損失回避！

当センターでは有機水稲の現地実証に取り組んでおり、その中で得られた収穫作業時の注意点として、ノビエが残った場合の対処方法を紹介します。

本県では、島根県農林水産基本計画（令和２年４月）において有機農業の拡大を推進しています。この計画達成に向けて、有機水稲の収量向上や低コスト化を目指して現地実証を行っています。ここでは、実証を進める中で得られた収穫作業時の注意点を紹介します。

有機水稲の基本的な雑草対策としては、深水管理や適期の機械除草などが必要です。しかし、田面の均平が不十分な場合などは、高い部分に局所的にノビエが残り、収穫前に水稲の上に出穂したノビエが目立ってくることがあります（図 1）。このような場合には、翌年以降に種子を残さない、またコンバインの詰まりによる収穫ロスを防止するために、手取りしてほ場外に持ち出しましょう。

また、手取り除草が困難で、ノビエ等の背が高い雑草が残った状態で刈り取る場合、コンバインのこぎ深さ自動調整（図 2）をＯＦＦにして、手動で適正なこぎ深さに調整します（図 3）。通常のように、こぎ深さ自動調整をＯＮにして刈り取ると、こぎ深さセンサー（図 4）がノビエに反応して一部の籾が脱穀されずに稲わらと一緒に排出されます。このような状況になると、収穫ロスが 10a 当たり数十 kg に及ぶことがありますので注意が必要です。

図 1　出穂したノビエ

図 2　こぎ深さ自動調整スイッチ

図 3　適正なこぎ深さの穂先位置

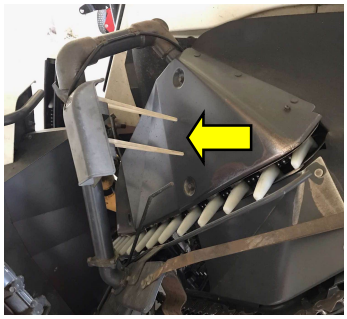

図 4　こぎ深さセンサー

問い合せ先：栽培研究部有機農業科（担当:安達康弘）
TEL ０８５３－２２－６８７４
Ｅ_mail:nougi@pref.shimane.lg.jp